

お取り越しの報恩講 …和歌の浦曲の片男波の…

平成 21(2009)年 12 月1日(火)

堅田 玄宥

ご讚題

帰命は本願招喚の勅命なり。

(Ref「行文類 六字釈(ぎょうもんるい るくじしゃく)」註釈版 P170)

帰命と申すは如来の勅命にしたがふこころなり。

(Ref「尊号真像銘文(そんごうしんぞうめいもん)本」註釈版 P651)

一、はじめに

地域の末寺の報恩講が終わりを告げますと、それからご門徒の皆様のお家でのお取り越しの^{ほうおんこう}報恩講が始まります。

西本願寺では、新暦で一月九日から十六日までの^{しっちゅうや}お七昼夜に亘ってご^{しょうき}正忌報恩講がお勤まりになります。それに先だって、末寺やご門徒のお家で報恩講をお勤め致しますので、これを「お取り越し(の報恩講)」と申すのでございます。

ご正忌報恩講の十五日は、夜通し「お通夜」がお勤まりになります。聞法会館で全国からえりすぐりの布教使様がお集まりになり、それぞれ、このとき一つというご法話をお聞かせ戴けるのでございます。

その同時刻、と云ってもお恥ずかしいことにこちらは夜通しではありませんが、地元北小松ではお西のお寺が二ヶ寺ありますので、毎年交互に会所を受け持ってご正忌お通夜をお勤め申すのであります。

平成二十二年のご正忌お通夜は正覚寺の当番でございますので、お同行の皆様方にはお誘い合わせてお参り戴きたいのでございます。

二、和歌の浦曲の片男波の

さて、報恩講の歌は「和歌の浦曲の片男波の」という言葉で始まります。これは続く「よせかけよせかけ」という言葉を導きだす前奏曲のようなもので、「序詞(じよことば)」という技法であります。

岸辺によせかける波というのは、面白いもので、一度だけ寄せかけておしまいということはありません。繰り返し寄せては返し、岸辺に届いて砕け散って音を立てて下さいます。

そうするとその有様は、まさにお念仏のお心そのものです。

なぜなら、南無阿弥陀仏の「南無」とは、「帰命」であり、「帰命」は、本願招喚の勅命であります(Ref「行文類」註釈版 P170)。本願招喚の勅命とは、阿弥陀如来様がご本願のお心から、「わが国に還っておいで」と呼び覚まして下さるお喚び声だったので、ご開山聖人(親鸞聖人)は、招喚の「喚」という字に「ヨバフ」と訓点を施しておいでになります。これは、一言でいえば、「マネキヨビツツケテイテクダサル」お姿であります。

まことに、南無阿弥陀仏のお念仏は、一度だけ喚んでおしまいではなしに、何度も繰り返して喚び続けていて下さる如来様のお喚び声であるからであります。

岸边は、私の胸底です。波は岸边に届いて下さいます。その有様は、私の思いを超えています。私がそう願うよりも前にそれと気づくよりも先に、はるかな世界から届けられているその姿は、お念仏が**本願力廻向**であることを彷彿とさせます。

真実の世界、お浄土から発せられた如来様の**本願力**によって届けられているのがお念仏だということになります。こうして、お念仏は、時を選ばず働いていて下さる“法”であることが知られるのであります。

波は岸边に届いて砕け散るとき必ず音を立てます。音のない波というものはありません。お念仏も、真実の世界からわが胸底に届いて下さった瞬間、南無阿弥陀仏と声を立てて下さいます。私が私の力で称えるというのではなく、如来様の**本願力**に催されて南無阿弥陀仏と称えさせて戴くのです。

如来様は「おねがいだから、私のまごころをよりどころにして、たとえ十遍でもお念仏してわが国に生まれておいで」と願っていて下さるのでした。

だから私は「南無阿弥陀仏」と称えさせて戴くのです。

その途端「南無阿弥陀仏」と聞こえて下さいます。聞こえて下さった南無阿弥陀仏は、「ワレヲタノメ、ワレニマカセヨ」とのお喚び声だと頂戴するのです。

その理証・文証は次の通りです。

仏説無量寿経の下巻に「十方恒沙の諸仏如来が無量寿仏(阿弥陀如来)の威神功德の不思議なることを讚歎したまふ」と示されています。これは約めて言えば、諸仏如来がお念仏(名号を称える)していらっしゃるお姿を指すのであります。

続いて、「あらゆる衆生は、諸仏如来の讚歎なされるその名号を聞いて信心歡喜する」のだと仏説無量寿経にお説き下さってあります。

実は、親鸞聖人は「南無阿弥陀仏をとなふるは仏をほめたてまつるになるとなり」と明らかにして下さるのでした(Ref「尊号真像銘文(本)」註釈版 P655)。

なんとありがたいことでしょう。

この仏説無量寿経下巻の御文と尊号真像銘文のお導きにより、私が「南無阿弥陀仏」と称えさせて戴けば直ちに聞こえて下さる「南無阿弥陀仏」を阿弥陀如来のお名号と聞かせて戴くのだというロジックが成立するのであります。

三、如来様から御覧になったお心と衆生の側から頂戴するお心と

親鸞聖人は、お念仏のお心を如来様の側から御覧になると同時に、衆生の側から御覧になります。如来様の側からそのお心を明らかにされたものが行文類の「**帰命は本願招喚の勅命なり**」でありました。

一方、衆生の側からこれを明らかにされたものが銘文の「**帰命と申すは如来の勅命にしたがふこころなり**」であります。ここでは、帰命は、如来様の仰せに従う心であるとおっしゃっておいでです。このことはご和讃の帰命のご左訓にも同様に示されてあります。

ご開山聖人が「帰命」のお心を衆生の側で受け止めれば、如来様の仰せに従う心だと受け止めていらっしゃったことは確かであります。

このことから次のように頂戴することができます。

如来様が「お願いだから、私のまことのこころに拠り所にして、たとえ十遍でも南無阿弥陀仏と称えておくれ」と仰せになっていらっしゃるのですから、これを受けて衆生である私は「如来様が願っていて下さるのですから、如来様の願いの通りに、南無阿弥陀仏と称えさせて戴きましょう。」ということになるのであります。

如来様のお心を衆生の心として明らかにして下さる親鸞聖人のご苦勞を私たちは今一度今日的な意味で、例えば、心理学上私たちがはっきりとそれと認識できる仕方を確認することは大変大事なことであると思われるのであります。

まことに、まことに、南無阿弥陀仏と称えれば聞こえて下さる南無阿弥陀仏を阿弥陀如来直々のお喚び声と頂戴することであります。合掌

著作編集兼発行元 りびんぐらいぶず編集室(浄土真宗本願寺派 正覚寺内)

〒520-0501 大津市北小松四五二番地 ☎&Fax077-596-0166 住職 堅田 玄宥

URL: <http://syohgakuji.web.fc2.com/>

E-Mail: mhkatata@pluto.dti.ne.jp